天理図書館蔵 宗鑑自筆 誹諧連歌抄の構成について

井口　壽

歌集の構成法は古今集から新しく出発したといえる。古今集の構成は和歌を同じ素材や境地のもの毎に集め、それを自然界や人情の移り変りの姿に従って排列し、全体として「あはれ」を中心とする独自の美の世界を示したものであるといわれている。[1] この構成はその後の代々の勅撰集にも受けつがれていった。連歌の場合も、二条良基は連歌を和歌と同等の価値ある文芸と考えたのであるから、[2] その撰集である菟玖波集の構成をこれにならったのは当然といえよう。そして宗祇の新撰菟玖波集もまた同様であった。しかし連歌の場合はその特有の形態や性格から同じ構成をとるにしてもその根拠の捉え方が和歌ほど単純ではない。和歌は一首で世界が完結するが、連歌の場合は前句の世界、付句の世界、及びその両者で形成する世界がある。これについて金子金次郎氏はその著「菟玖波集の研究」で構成の根拠は付句の内容にあるが例外的に前句の場合もある旨述べていられる。誹諧連歌の場合になると後者の場合もかなり多く、たとえば天理図書館綿屋文庫蔵宗鑑自筆大永本誹諧連歌抄（以下天自本と略称）では約14％が前句を根拠に排列されている。のみならず、前に長い詞書がありそれにつづいて、

松かざり兵衛物こふ夕かな

と申ければ件僧納所をよひ出て御庵へ御つかひをまい（ママ）らせつるかと申けれハ御未進莫大のよし申けれハさんようハ年あけてのこと也使ひくへきよし申付て是を脇

の句に用ひらるへしとてかへしけりとそ

とあって前句だけが出ていて付句がはっきりとした形で出ていない場合もある。③この他、

内ハあかくてそとハまつくろ
しらねとも女のもてる物に似て

まことにはまたうちとけぬ中なをり
めうとなからやよるを待つらん

この両句は諸本恋の部にあるが前句付句ともに恋の意は無く、両者合して始めてそれが現われる。前句付句で形成された世界が排列の根拠とされているわけである。また、

これや末世の大師なるらん
うゐ穴をあくる人こそたうとけれ

が諸本太刀の句のグループに入っている。これは同じく太刀の句のグループにある

山法師こそごけ入をすれ
長刀を野太刀のさやにさしこミて

にみられる「太刀」の「用」と付句を考え、太刀の語は無くとも句の背後にそれを認め**て**の分類であろう。

さらに、発句の詞書に「正月六日に」「人日庚申にあたれば」「おなじ日云々」「おなじ比云々」とつづいているものがあり、これは制作の日でならべたことを示している。

三句以上つづいて出ている場合、あるいは同じ前句に幾人かが付けた所謂前句付的なものの場合も、たとえば

おもしろさうに秋かせそふく
七夕のいをはたおれる足ひやうし

又人の付ける

うちまはすへたさるかくのまくす原

はその前後が七夕の句である所から第一の付句が排列の根拠となっていることは明らかであるが一方

いかはかりこゝろにしますおもふらむ
そはへくすりをさせるたゝれ目」

すきの衆東のたひにおもむきて
たつぬやすりちやつほの石文

こゆるやなたのさやの中山
ほりこをさんもいさやふしのね」

水のそこにも碁をやうつらん
さゝかにの岩のはさまにこうたてゝ」

の排列では始めの句の「しまず」を「心に染む」ととりなして、次の「すきの衆」を出し、さらに次の「碁」の句を置いたと思われる。するとこれはいずれも前句を根拠としたことになる。

これらのことから、誹諧連歌集の場合、その構成の根拠

はいちおう付句の内容としながらも、必ずしもそれに拘泥せず、適宜その場その場で処理されていることがわかる。従って本論においても一方ではその根拠を明らかにしながら集の構成をみていくことにした。

今日誹諧の連歌を集めたものはまとまったものだけでも十指に余るものが伝えられているが、現存最初の誹諧連歌集である「竹馬狂吟集」（明応八年）は別として、世に所謂「犬筑波集」なるものはいちおう宗鑑の撰から出発していると考えられているので、彼の自筆本であり、かつ「首尾整った唯一の完本」[④]とみられている天自本（大永本）を調査の対象とした。この本は始めに発句93、次に付句156[⑤]があり、発句は四季に、付句は四季・恋・雑に部立されている。菟玖波集や新撰菟玖波集が付句を四季・神祇・釈教・恋・雑・羈旅・賀等に分類しているのに比し、頗る簡単で根幹のみということができる。これは前二書に比して句数が少いことによるとも思われるが、一面、誹諧連歌が滑稽機知という一点をねらいとする所から細かい分類を必要としなかったともいえるであろう。

春付句の内容をみるに、立春（1 2）[⑥]梅（3 4）鶯（5）梅（6 7）若葉（8 9）野焼（10）雲雀（11）梅（12）霞（13～16）帰雁（17～19）花（20～28）茶摘（29 30）つくつくし（31 32）の順である。始めに春の女神佐保姫を出して立春と結び（1）次に先がけて咲く梅に同じく立春を結び（2）軒端の梅（3）梅が枝を手にしたしやれ男（4）に新年の戸外の風景を、次に正月の室内の飾り物を鶯と結んで（5）ならべて巻頭を飾ったと思われる。なお梅の句については

2　あなうれしやな餅いはふころ
　梅かゝの先鼻へ入はるたちて
3　うそをふき〳〵花をこそおれ
　軒はなるはちのすはひに梅さきて

とあって2で鼻、3で口をならべ構成上の面白味をねらっている。次に6 7と再び梅の句が来るのが不審である。これは3 4 6 7とつづいている梅の句の中に5の鶯の句[⑦]が何らかの理由で割り込んだと考える方がよいようにも思われるがその理由は不明である。次に若菜（8 9）野焼（10）とつづく。次の句

11　大さかつきをこのむ山ふし（のはやる春のゝ（マヽ））
　なくひはり雲に五度入十度入

は平出本に

　大さかつきをすける山ふし
　かつらきやみねに五度入十度入
　あかりもてゆくさけのさかつき

たつ雲雀雲に五度入七といり（十袋中本）

とある中二句をとばしたもので、諸本春になく別々の句として共に雑に入っている。まちがって混入したものであろう。次にまた梅(12)があるが、末吉・真如・潁原・袋中各本いずれも第6句の梅の句のあとに入れているところから天自本の未整理と思われる。次に霞の句4句、始めの2句は実の霞、後の2句はたとえば

16　さとのおとなのはなをミるころ
　我ほとの物ハあらしとかすませて

の如く実の霞でない句を置いている。このことについては応其の「無言抄」に

　かすむると云詞春にならすといへとも肖柏の句にいくへ物いひかすむらんなど春の句なれハかやうの詞ハすこしあひしらへハ其季になる也他準之文なとかきかすむるも春なり

とあり、連歌の方で既にかかる考え方があったことがわかる。次に帰雁3句花5句春風1句花散る1句春2句とつづくが、この中花以下の排列は次に示す実線どうし、波線どうしの関係で進められている。

24　もつともとこそ人ハミるらめ
　へたのかく花といふ字のゆふまくれ

25　秘蔵のはなのえたをこそおれ
　よひよせてつふり春かせ我むすこ

26　はなちかしらのうちもねられす
　風わたるよるの枕に花ちりて

27　ちる花をとめてミハやななさしませ
　おかしからすや又もこん春

28　さくらがもとにねたる十こく
　春のよの夢のうきハしのすゝめして

花→風→散る→春と進み、同時に全体を「植物（ウエモノ）」でまとめている。次に茶摘み、つくづくし各二句が来て終るが、これは前掲28の十こくの縁で役の行者(29 30)をおき、

30　是もや役の行者ならん
　はたかにてつむ人ミゆる茶の木原

の「はたか」に対して

31　春のゝにいんぎんかうのはしまりて
　まつつく〳〵しはかまをそきる

と「袴を着る」を、またそれに対し次句では「袴を脱ぐ」(32)と対立関係でならべ、かつ「植物」で前につづけている。

春発句　正月(157 158)　若菜(159～163)　霞(164)　梅(165～168)　鶯(169)　ふきのたう(170)　雪解(171 172)　犬さくら(173～177)　蛙(178)　春

風(179～181)花(182)つつじ(183～185)春日(186)藤(187 188)雲雀(189 190)花(191～193)の順、この中

168　梅さくらにやうたかまの二木かな

169　なけうくひす物かたりの春のやと

の排列については、167までは梅の句、168が右に示す如く梅と桜が素材としてあるため梅のグループの最後に置き、かつ句意が「似合うた釜の蓋」という当時の諺⑨を背景として二木を釜の蓋の木とかけているところから釜の連想として宿の句(169)を置いたとみられる。171の雪解の句は170の詞書に「余寒のこころを」とある連想から持って来たのであろう。雪解の句の次に再び「植物」である桜が来ているのは季節の推移に従ったものである。

180　花のころ御免あれかし松のかせ

二月十五日夜風はけしかりけれハ

181　春かせに釈迦むり〳〵の軒ハかな

おなし比人の追善の砌（以下略）

182　花ミれはけによいしんの浄土哉

の排列は180の松の風から181の春風に、181 182は釈迦と浄土との関係とともに制作の日で並べたと思われる。

183　かへるなよ山ハとり〳〵もちつゝじ

184　花よりもだんごとたれか岩つゝじ

185　春のなこりたれかしるこのもちつゝじ

続いての三句いずれもつつじの句であるが傍線に示す如く食物でまとめられ、次句も

186　麦ハなしたゝむしくらす春日哉

とむし麦の句が来る。190は天自本のみの句、次の191 192 193の花の句は天自本春の最後の丁の裏から始る句であり、花は既に出ているところから、190以下は追加した句ではなかろうか。191は平出本が、192は頴原・古活字・整版本がそれぞれ花の位置に訂正している。193は真如・頴原・末吉各本とも訂正されていない。

以上春付句発句の排列についてみてきたのであるが、季のことばによる句順については二条良基の僻連秘抄にある十二月題・紹巴の至宝抄にある四季を初中後にわけ、それぞれに該当する語を示したもの、及び一条兼良の連珠合璧集中の季語の排列順に一致していて大体和歌連歌の構成に従っていることがわかる。しかし一方細部については既に述べた如く、前句又は付句に同語を含んだものをからみ合せながら続ける。十こくと役の行者、釜に宿の如く連想的に句を続ける。裸に着る、次に脱ぐと対立概念のもので続ける。鼻と口という同類異種のものをならべる。たべ物の語を含む句をまとめるという工合に機知的関連性が大きく

構成に作用していることがわかるのである。また、ふきのとう・雪仏・犬ざくら・もちつつじ・岩つくじ⑩・茶摘み・つくづくし⑪などはいわば俳諧的な感覚で新しく季節の風物として捉えたものということができるであろう。

夏付句　時鳥(33～35)賀茂祭(36)夕顔(37～40)夏の夕風(41)夏の日(42)螢(43)つはひ桃(44)涼む(45)たでひやしる(46)姫ゆり(47)の順、このうち時鳥(35)の次に「賀茂祭」がきているのは鳥から酉の日へと展開したものと思われる。また

39　勧進ひしり時もえくハす
　こしにさすひしやくのしるハまたにへて

40　蚊なりとは孔子の詞夕かな
　回が瓢箪なりつるゝやと

41　たかぬ日に蚊のこゑにゆるかまと哉
　あつさこじくる夏の夕かせ

42　いかほのぬまの水をこそのめ
　夏の日ハゆく〳〵あせをかきつはた

の排列は各句の各種傍線どうしの関係で展開している。次に螢の句(43)がくるが、巻頭の時鳥との関係は同じ「動物」ながら前者は鳥類、後者は虫類（連珠合璧集の分類）である上、僻連秘抄によれば時鳥は四、五月、螢は五、六月、夕顔は六月となっており、季節順にならべたこととなる。次に飲食関係が置かれてずはひ桃(44)酒のみ涼む(45)たでひや汁(46)と進み、最後に姫百合を具足と結んで終る。

夏発句は芥子(194)時鳥(195～201)竹の子(202 203)卯の花(204)五月雨(205)夏木立(210)うちは(206)氷室(207)夕顔(208)夕立(209)撫子(211)の順、巻頭句は夏の「日焼け」と「芥子」とをかけて夏の代表句として置き、次に時鳥の鳴くを待つ句、鳴く時鳥とつづけ、時鳥最後の句「名乗せば氏やたちはなの時鳥」(201)から武士の意をとって次の「さかふるは大ミやう竹のことしかな」(202)と大名を導き、さらに「竹のこのふときもおやのめぐみ哉」(203)と親への連想となる。次に卯の花・五月雨・夏木立と四、五月の景物を置き、うちは・氷室以下六月の景物をつづけて終っている。

春部同様句順は前揚連歌論書にみらるる季節の推移と一致している。夏木立の句がもと夕立の句の後にあったのを宗鑑自身符号で五月雨の次に移すように示している⑫ことからみても句順については注意していたことがわかる。構成の細部の点では鳥から酉の日へ、名乗りから武士、さらに親へというような連想的展開がみられる。また食物関係で句をまとめたり、前句・付句に同語を含むものをからみ合せながら展開していく構成は春の部と同じである。食物で

まとめるという点は誹諧的といえるであろう。なお、この部では「けし」「うちは」などが新しく季を表わすことばとして登場している。

秋付句　七夕(48 49 50)　虫(51 53)　露(52)　草花(54)　いぐち(55)　雁(56)　月(57～66)　栗(67)　月(68)　の順。巻頭を

48　三ほしになる酒のさかつき
　　七夕も子をまうけてやいハふらん

と年に一度の逢瀬を楽しむ七夕もはや出産祝とめでたい句で俳諧的に飾る。袋中・平出・真如・潁原各本いずれもこの句を巻頭に置く。53の句は宗鑑自身符号で51の次に移すべきことを示している。その結果虫の付句がまとまることになる。

55　つんぬめり〳〵たる恋のミち
　　よくにすましていくちをそすふ

福井久蔵氏[13]も鈴木裳三氏も「いくち」を兎唇として「欲のために兎唇を吸う。相手が金持だから兎唇でも我慢をする。前句のつんのめるを唾を飲むとして、口を吸うを出した[14]」としていられる。するとこれは恋の句であって何故秋の部にあるのか不審である。前の句が

44　どこともいはずちぎりこそすれ
　　ひさうする庭の草花をこひめこせ

とあって、大切な庭の草花をやたらに娘がちぎるという句であるが、この前句が「ちぎり」から恋の意にとれるところから、それにひかれて「恋のミち」が出たのであろうか。小学館「日本国語辞典」の「いくち」の項に、ぬめりいぐちとも言って多く食用とし、針葉樹林内の地上に生える旨記し、名語記やお湯殿上日記文明十二年の記事が示されている。あるいは、前句の「ぬめり」から「ぬめりいぐち」を出し、同じく前句の「恋のみち」を「泥（こひじ）のみち」として、泥だらけの道をぬめりながら探し、欲にかまけて猪口茸までとって来て汁にして吸うという意を持たせて秋の部に入れたのであろうか。この句平出・潁原・真如・袋中各本にあるがいずれもこの位置に置かれている。57～66は月の句であるが、この最後の二句が三ヶ月、次が月影無しで漸次月が消えていく形をとっている。68に再び月の句が出るが、この句は「竹馬狂吟集」秋に

　　おそれなから入てこそ見れ
　　我足や手洗の水のつきのかけ

とあって古くからあった句と思われるが、天自本では秋付句の最後の句で以下余白[15]となっているところから後の追加の句ではないかと思われる。他本でこの句のあるのは古活字本・整版本・鷹司本で共に類従されていない。

秋発句　七夕(212)金虫(213)蘭(214)萩(215)月(216)松茸(217)月(218 219)紅葉(220～224)菊(225)月(222)の順。216の月の句は頴原・真如・末吉・古活字・鷹司各本では218 219とつづく月の句の次に位置しており、天自本の未整理というべきであろう。但し、平出本のみは天自本と同じ位置にある。また、226の月については宗鑑自身この位置を不適当と認めて他に移す符号をつけているが、どこに移すかは明らかにしていない。この句は平出本・袋中本にあるが、袋中本は付句無いままに秋付句の部にあり、平出本はこの句を最後にあとは独自に追加したと思われる句がつづいている。従って天自本の場合も後に追加した句とも考えられる。220から五句紅葉がつづいているが、終りの方の223 224は実の紅葉ではなく「けこしやうこましるさしきや村紅葉」(223)の如く比喩的に用いられたものである。225の菊の句については、「植物」としての蘭・萩が既に出ているが、これらは八月（僻連秘抄）または初の秋（至宝抄）のものであり、菊は紅葉とともに九月（僻連秘抄）のものとされており、季節の推移という点からこの位置に置いたものと思われる。

秋の部においても未整理乃至後の追加と思われるものを除いては伝統的な季節の推移に従って句を配しているが、付句は七夕・動物・降物・植物・動物・光物・植物の順、発句も七夕・動物・植物・光物・植物の順で大体両者とも同様の構成になっている。前の動物・植物はそれぞれ虫、草花であり、後のは雁（鳥）、紅葉（木）となっている。なお、いぐち・金虫・松茸は新しい季語と言えよう。

冬付句　時雨(69)火榻(70)衾(71)冷える(72)衾(73)垂氷(74)節分(75)往く年(76)煤掃(77)冬(78)松飾(79)正月(80)の順。この中73の衾は天自本の未整理というべく、袋中・平出両本は71の衾のあとに訂正されている。但し、鷹司本は天自本と同じである。

冬発句　神無月(227～230)霜風(231)雪(232)木葉落つ(233)木枯(234)雪仏(235～243)猪の子(244～246)霰(247)風寒し(248)夜神楽(249)の順。神無月の句は第二句めから「紙無し」とかけた句であり、最後の句230は

神な月のころ女あるしの留守なる所へまかりて一折ありしに

いつもへの留守もれやとの福神

と神無月の語が表面に出ていない句である。そしてこの句に男性が暗示されているところから次の231 232の句は

231　霜風にふるひおとすや松ふくり

232　ミえすくやかたひら雪の松ふくり

とふくりと結ばれた句を持って来ている。

坂本より誹諧発句として所望に

234　猿のしり木からししらぬもミちかな

もし少人なとの御さしきならハさるのかほ

の句は末吉・真如・頴原・平出・古活字・鷹司各本紅葉の句として秋の部に入れてあるが、天自本は木枯の句と解したのであろうか。平出本は232と233の句の順を入れ替えて232の雪の句を235の雪仏の句とつづけて雪で類従した形にしているが、そのため一方では天自本の場合にみる「ふぐり」での類従は消えてしまっている。猪の子（244～246）が頴原・真如・古活字・整版の各本では冬の最後に置かれているが、猪の子は陰暦十月中の亥日であるから句順としては天自本の方が正しいと思われるがどうであろうか。

冬の部もいちおう和歌連歌風な季節の推移に従って排列されているが、その根拠となった語には火榻・節分・煤掃・松飾・正月・霜風・雪仏・猪の子等和歌連歌の季語と異なり生活に即したものが多く現われている。一般に四季に分類するということは伝統的な方法であり、従って排列も自然と和歌連歌の如くならざるを得ないのであるが、その中にあってもたとえば梅桜雪などを伝統的な感覚によって捉えるのではなく、梅漬け・犬さくら・ゑぼしさくら・かはさくら・雪仏といった形で捉え、神無月も紙無し月、さらに貧乏神の留守の月と俳諧的に捉えている。しかし四季の部ではこれらのことが構成上新しい秩序を生み出すというところまではまだ至っていないのである。

恋の部は81から107まで二七句ある。この中には所謂恋のことばが入っていず、恋情も示していない句がある。これは滑稽機知をねらいとするところから必しも恋を精神的なものに限定せず性行動をも含めて考えたためであろう。若衆・よばひ・口吸ふ・腎虚・ちぎる等が恋のことばとして新しく登場してくる。また

106　東ちのたかむすめとかちきるらん

相さか山をこゆるはりかた

が恋の部にあるのは必ずしも前句の「ちぎる」によるのでなく、平出本に

これやむかしのお比丘尼の跡

浅茅生のかげのはりかた朽ちやらで

が恋にあることから「はりかた」を恋としたのによると考えられる。恋の部の構成については古今集誹諧歌の場合、忍恋・会恋・会不会恋の三部からなるとされているが[16]、連歌の場合は紹巴の至宝抄に忍恋にあたるものとして聞く恋・見る恋、会恋に対して待恋・忍ぶ恋・逢ふ恋、会不会恋に対して別る恋、恨む恋と分類している。これらに対し誹

諸連歌の場合は必ずしもこうした古典的な恋の進行類型に終始していない。天自本ではまず若衆との馴染(81)を巻頭に置く。諸本皆同じである。次に待つと言って寄せず(82)、次に契る(83)とつづけていわば序論のようなまとまりがあり、その次に恋の進行順で排列、恋の初期としてミめよし(〔女〕84〔男〕85)、訪い来ず(89)、思われず(90 91)、この間に挿入的に嫁入(86 87)聟入(88)がある。次に恋の中期としてあくめみゆ(92)、うらみごと(93)、腎虚(94)、若衆にだきつく(95)、若衆の口すふ(96)、女の持てるもの(98)、夫婦夜を待つ(97)そして「恋ハ弓おれ矢つきた」(100)の句で終る。次にことばのからみによる排列がくる。

101　堂のはうすの恋をするころ
　玉章やしきミの花につけぬらん
102　人のなさけや穴にあるらん
　玉章をこよひ鼠にひかれけり
103　あなをのぞけるおやをもちけり
　ちきるよをおとなけなくもさまたけて
104　ふりわけかミををしやりにけり
　うなひことミしひめこせの新枕
105　寺よりもおさとの空ハこひしくて
　花わかどのゝあねこ恋しも
106　東ちのたかむすめとかちきるらん
　相さか山をこゆるはりかた
107　なしとこたへてかへす山寺
　入逢のかねてハまつといひしかと

107は天自本のみの、他本にみえぬ句である。

雑部は人事の句がほとんどで、連歌が山類・水辺・夜分・植物等で分類されているのとは異なり、まず国を治める公家と武士の句(108)で始め、次に山伏(109)、国(110)、聖(111 112)とつづく。この中、山伏の句は所出の伝本すべてこの位置にないが、天自本は山伏の句はこの句一つだけのためここに置いたとも考えられる。また

111　なかさきの聖として此ミちにたへなる
　おハしましけり
　かた木のあしたはこそつよけれ
　といふ句に
　さと〳〵をハしりまハれとつひもせす

は付句からは「つび」で恋となるはずであるが、竹馬狂吟集や吉田本では前句付句が逆で雑にある。天自本がまちがって逆にしたのではなかろうか。なおこの句の後に左注の形で「おなじ御聖はきへはへ跡へもとるなくすかづらといふ発句をあそハして（下略）」とあるが、この句他本では秋

発句にあり、天自本は「ついで書き」に書いたと思われるので雑部の構成の中には入れて考えなかった。次に前の句の「つび」から「子をまうく」(112)に、そして男性の象徴として「ふぐり」の句(113～122)へとつづく。これには松ふくりの句も含んでいる。次が賽の河原の句(123 124)この124の句

わらハへのよはゝるころゐにおとろきて
はぬるやさいのかはらけのこま

の付句の「こま」から駄賃が連想され

125　いはら木まてハ百にてそつく
と申すハ吹田よりの駄賃のことにて有けるを連歌
にきゝなして
陳立をしものこほりの小ぶげんしや

が来る。この付句の陣立から武具が連想されて太刀の句となる。即ち重代の太刀(126 127)野太刀(128)白銀太刀(129)文珠四郎の太刀(130)赤尻鞘の太刀(131)仲間の太刀(132 133)太刀ぬく(134)太刀の空鞘(135)太刀で穴をあける(136)太刀でものの怪を払う(137)竹刀(138)鮫づか(139 140)である。次いで鑓の句、人体の鑓(141)突く鑓(142)鳥を刺す鑓(143)足軽の鑓(144)仏の鑓(145)蚊の鑓(146)となる。この類の最初の句

126　のこふへき紙をてにもちなくはかり
ちこの得度にあへるかミそり
又人の付ける
おやのゆつりの太刀そさひたる

は真如・平出・整版本は付句の順が逆で、潁原・鷹司本は「ちこの得度」の付句がない。古活字本では「親のゆつりの」が前句となり付句が「のごふべき」「ちごの得度」の順となっている。天自本と等しいのは袋中本のみである。句を書く場合興味のある句を先に書くような場合もあったのではなかろうか。刀鑓類の次は数寄の句が来る。

147　いかはかりこゝろにしますおもふらむ
そはへくすりをさせるたゝれ目

の前句「こころにしむ」を数寄にとりなし、次にすきの衆(148)碁(149)と置く。最後に仏の類。まず阿弥陀の句として

250　一すちにあミたのひかりたのむ也
ちやわんのはたの墨染のそて

次に名号(151)来迎(152 153)聖霊(154)供養(155)最後に

156　仏の弟子のこもる伽耶城
阿のくたら三百余騎を引くして
弓矢のミやうかあらせ給へや
是ハアケ句也

これで大尾となる。かくみてくると雑の部は連歌の分類と

はちがった形で整然となっていることを知るのである。

以上天自本を対象として誹諧連歌集の構成をみてきたのであるが、古今集が「あはれ」の世界を画いたとするならば、これは通俗的な意味での「をかし」の世界を盛り上げようとしたもので、その構成法も独自のものがあって然るべきであるが、古今集を起点とする歌集構成法の伝統があまりにも根強いために、集の形式を整えるためには和歌の部立に従い排列も基本的には和歌のそれに準拠せざるを得なかったと思われる。しかし誹諧連歌の本領である恋や雑の部[18]にあっては、既に述べた如く新しい独自の排列がなされている。殊に雑の部においては全く和歌的排列から離れ、公武（政治家・統治者）・国・聖とまずならべ、次いでつび（女性）・出産・ふぐり（男性）、それに次いで博徒・武具（武士）次に数寄、最後に釈教という排列であり、当時の社会の構成を見る如き感がある。これは誹諧人が室町時代における現実の社会や生活に目を据えた所[19]から自ら生れ出た分類乃至排列法であろうと思われるのである。

註

① 松田武夫氏「古今集の構造に関する研究」

② 良基は「連歌は歌の雑体也」（連理秘抄）とか「歌を二人して云ふを連歌とは申也」（筑波問答）といっている。

③ 潁原本には「注連もつかひも曳そめてたき」と付句が出ている。

④ 木村三四吾氏の大永本解題による（ビブリア49号）

⑤ 三句以上連続したものも、前句付的なものも一句と数える。

⑥ 春付句巻頭を1とし順次付した番号。

⑦ この句平出本になく、整版本のみは春巻頭に置く。宗長手記によれば宗鑑の句である。

⑧ このことについては木村三四吾氏の前掲解題にくわしくのべられている。

⑨ 鈴木裳三氏「犬つくば集」角川文庫再版脚注による。

⑩ 「つゝじ」としては僻連抄にある。

⑪ 「つく〳〵し」は連珠合璧集に筆の寄合としてある。

⑫ この符号を解読されたのは木村三四吾氏である。（ビブリア49号）

⑬ 福井久蔵氏「犬筑波集研究と諸本」

⑭ 鈴木裳三氏前掲書。

⑮ 天自本では部立毎に終りに余白があり、後の追加が考えられていたとも思われる。

⑯ 松田武夫氏前掲書。

⑰ 金子金治郎氏「菟玖波集の研究」

⑱ 誹諧連歌は人事面や機知の面白さが中心となっているため、いきおい四季よりも恋雑の部に入る句が多くなる。付句については諸伝本平均して68％が恋雑の句で占められてお

り、和歌の本領が四季・恋の部にあるとすれば、誹諧では雑・恋にあると考えられる。

⑲　中世民衆に蔓延した賭博が分類項目に入っていることもこの証左の一つであろう。このことについては岩崎武夫氏「中世民衆の生活文化」増川宏一氏「将棋」の中でのべられている。

（本学専任講師　国文学）